農業・農村の福祉力とむらおこし

藤本信義

とちぎボランティア NPO センター所長
e-mail：fujimoto@tochigi-vnpo.net

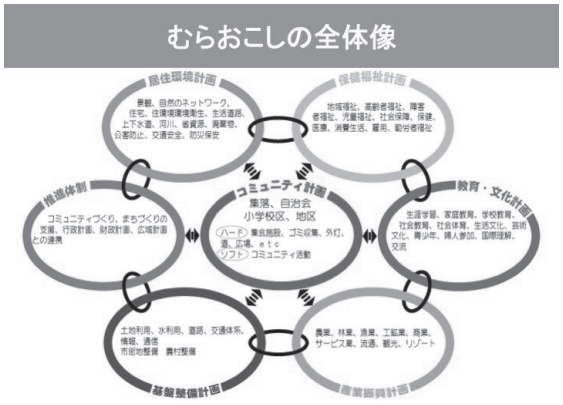
Welfare Power and Revitalization of Agriculture and Farming Area

Nobuyoshi FUJIMOTO

Tochigi volunteer NPO center

はじめに

筆者は建築学を専門としており，長年にわたり地域計画からの視点で農家の住まいの改善や農村振興について調査研究してきた。むらおこし・まちづくりは市町村の総合計画の一つであり，居住環境計画，保健福祉計画，教育・文化計画等を包含している（第１図）。むらおこしは市町村のレベルだけでなく，より暮らしに近い地区単位の範囲でのコミュニティづくりが重要となる。自治会や町内会を基礎とするコミュニティ計画は，ハードとソフトの両面から進められるべきものである。本稿では，農村と都市の特性を比較しながら，農業・農村の福祉力について考察する。



第１図　むらおこしの全体像.

農村と都市の特性

農村のこれからを考えるとき，都市も相対化してとらえることが重要である。都市計画の分野ではコンパクトシティが共通の課題となっており，宇都宮市もネットワーク型コンパクトシティを目指している。

しかし，日本においては中世ヨーロッパのような，元々城壁に囲まれていたコンパクトな都市づくりは難しい。また，都市機能の集積だけを考えて農村を軽視したコンパクトシティは，都市自体の衰退を招く。筆者はもっと広い範囲でみて都市と農村が相互に交流し，補完し合いながら役割を果たす「コンパクトリージョン」という捉え方が望ましいと考えている。

農村は都市が無くても成立するが，都市は農村無しには成立しない。農村と都市の特性の違いは，産業構造の差異から生じるといってよい。現象面でみれば，

農村の特性

- **自然性**：維持保全／順応・利用／制御
  →緩速・少量・安定・保守
- **複合性**：兼業化／生産・生活の複合／複合経営／生産・消費の資源循環（有畜農業、バイオマス）／生物多様性
- **属地性**：生産手段としての土地固定
  →定住・歴史・伝統・小規模・疎住
- **共同性**：土地・水の共同管理／むら社会の維持（ユイ、冠婚葬祭等）

都市の特性

- **人工性**：自然への依拠は限定的
  →新陳代謝／高速／革新／大量供給
- **分化性**：分業体制／専門化／職業選択性／土地利用の純化
- **属人性**：職人／技術者／事務員／スキル／管理能力／転勤・異動・転職／サービス
- **個別性**：ゲゼルシャフト的結合／匿名性

第２図　農村と都市の特性の比較.

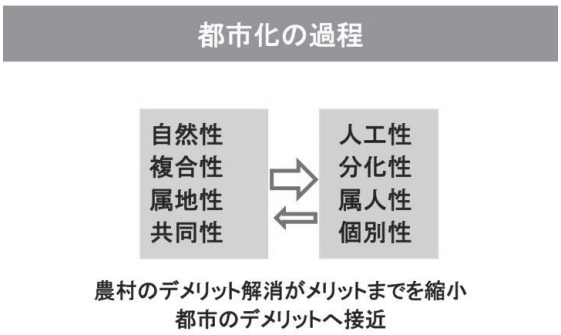
2014 年 8 月 30 日受付.

農村は「人口少」,「疎住」,「自然」,「等質」,「直接的関係」,「歴史・伝統」,「定住」などのキーワードがすぐに浮かぶ。一方，都市は「人口大」,「密住」,「就業機会大」,「交通利便」,「高度情報」,「新陳代謝」,「流動」などに特徴づけられる。

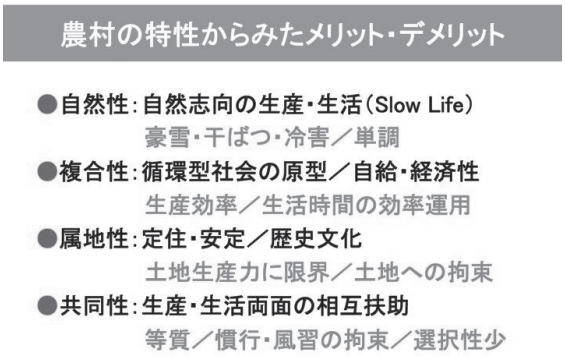
第２図は，農村と都市の特性を４点に絞って整理したものである。この「特性」には，メリットだけでなく，デメリットも含まれる。農村の自然性はメリットだけでなく，生産・生活に様々な制約をもたらす。複合性という意味では，農村はエコロジカルな持続的社会の形成を先導している。スローライフによって，自分で手間暇をかけて作って消費することは有意義ではあるが，一方，効率面では劣る。属地性では，土地の生産力を保持する点もあるが，一方で土地の生産力には限界があり，土地に拘束されるという側面もある。共同性はメリットであるが，拘束的で選択性がないという点もある。

農村の都市化

農村においても近代化が進み，都市の特性に徐々に近づいていく（第３図）。その過程で，農村の持つメリットが希薄になっていくことに大きな問題がある。ここで重要なのが，第４図の農村のメリットを振り返り，生かしていくことである。



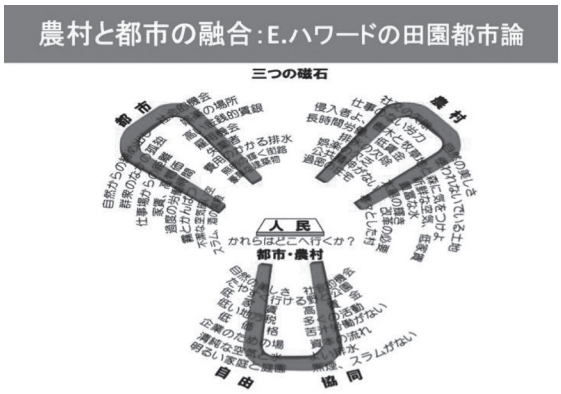
第３図　農村の都市化の過程.



第４図　農村の特性からみたメリット・デメリット.

田園都市論

農村のメリットと都市のメリットを共有して，デメリットを解消すること－これを目指して 1898 年に提唱されたのがエベネザー・ハワードの田園都市論である（第５図）。



第５図　ハワードの提唱した田園都市論.

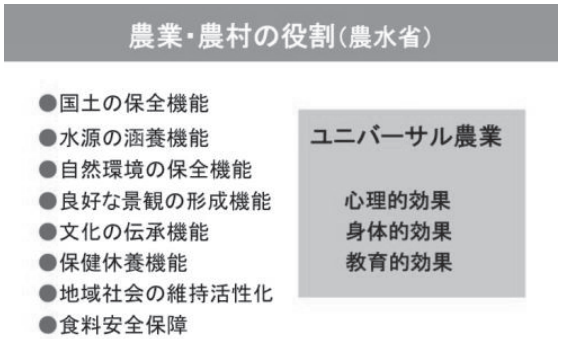
第５図には都市，農村，都市・農村の磁石が描かれている。都市では「自然からの締め出し」,「群衆のなかの孤独」,「仕事場からの距離」がデメリットであり，「社会的機会」,「娯楽の場所」,「高い金銭的賃金」,「雇用機会」などがメリットとして挙げられる。

一方，農村は「社交の欠如」,「仕事のない労力」,「長時間労働」,「娯楽の欠如」などのデメリットと,「自然の美しさ」,「新鮮な空気」,「豊富な水」,「低家賃」などのメリットを併せ持つ。両者のメリットを融合させたのがハワードの『田園都市』である。

日本でも 1980 年の大平内閣のもとで田園都市政策がまとめられ，田園都市センターなどの集会施設が具体化されたが，政策全体として十分な成果を上げたとは言いがたい。

農業・農村の役割とユニバーサル農業

具体的な農業・農村にはどのような機能が期待されているであろうか。農村に期待される役割を第６図に



第６図　農業・農村の役割.

あげた。これらの機能の中に，栃木県の進める「ユニバーサル農業」の要素も包含されており，両者が複合して結びついている。「良好な景観の形成機能」については，栃木県でも田園景観百選を選定している。

一方，栃木県のユニバーサル農業では第７図のように六つのタイプに分類している。農村の福祉力を生かした企業協働タイプの例として，栃木県那須町のNTTデータだいち那須事業所が挙げられる。ここはNTTデータの特例子会社であり，数名の障がい者を雇用している（第８図）。ここでは，農業生産の他，周囲の牧場やサービス付き高齢者住宅の仕事を請け負っている。豊かな自然に恵まれており，社員や家族のリクリエーション施設としての役割も担っている。

ユニバーサル農業のタイプ

❶技術指導・営農支援タイプ
❷作業委託・協働タイプ
❸一般雇用・就労タイプ
❹教育・レクリエーション支援タイプ
❺企業協働タイプ
❻新たな連携構築タイプ

（栃木県農政課/ユニバーサル農業研究会）

第７図　栃木県ユニバーサル農業の６つのタイプ.

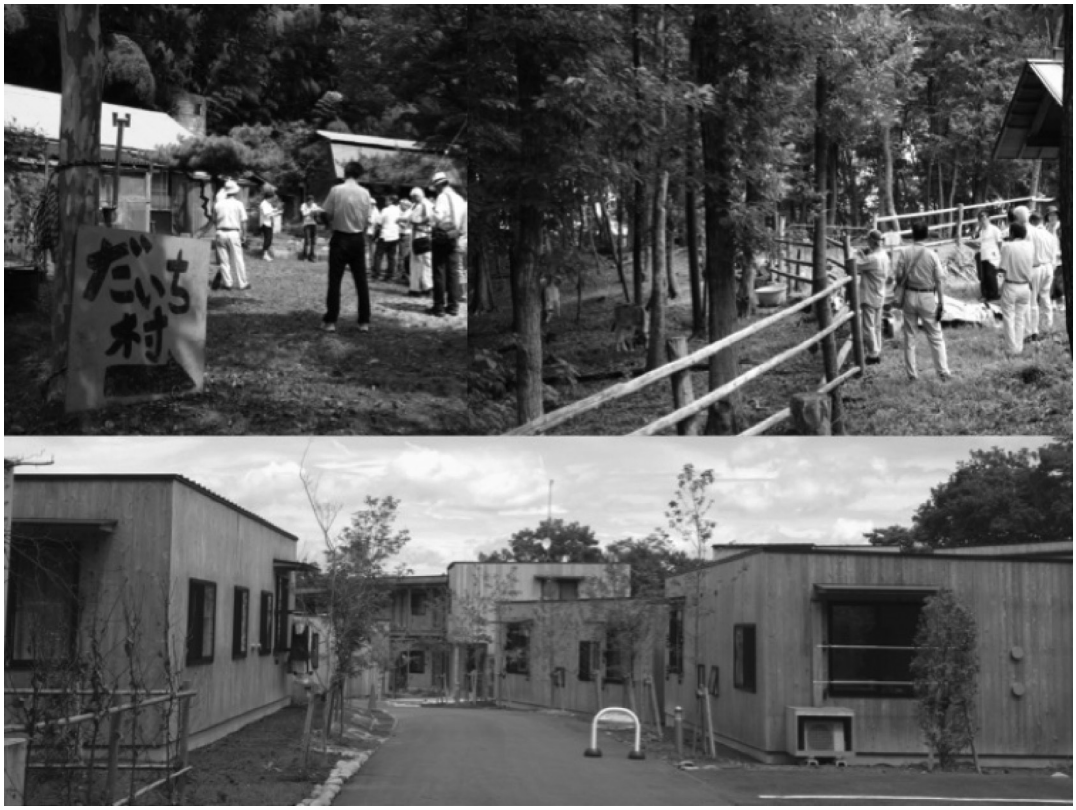
田園ウォーキング

農村の自然を楽しむ活動として，農林水産省は「田園空間博物館」事業を実施してきた。また，日本フットパス協会が森林，田園地帯，古い街並みなど地域に昔からある風景を楽しみながら歩く活動を進めている。これらの流れを受け，栃木県でも「田園ウォーキング」が行われている。例えば，市貝町のケースでは田舎道を８km から13km の三つのコースを選んで歩くものであった。その他，歴史とロマンのカンピョウ街道，高原山麓水街道など地域の特性を生かした様々な企画がなされている。

田園ウォーキングでは，参加者に楽しんでもらいながら，地元にお金が落ちる仕組みも必要であろう。現状では都市からの参加者と地域住民とのコミュニケーションの機会が少ないので，手法を検討する必要があると考える。

グリーンツーリズム

グリーンツーリズムは1994年の農村休暇法に基づき，全国的に普及してきた。都市と農村の共生・対流という意味でもグリーンツーリズムは重要である。現在，栃木県においても栃木グリーンツーリズム推進事業を「おもてなし」,「おすそわけ」,「おたのしみ」と



第８図　NTTデータだいち那須事業所・周辺の牧場・高齢者居住施設.

いうキャッチフレーズのもとに進めている。具体的には「観る」,「泊まる」,「農の体験」,「食べる」,「学ぶ」,「遊ぶ」,「買う」，という７メニューを掲げており，大田原市などを中心に人気は高まってきている。

「泊まる」活動について，栃木県では恵まれた温泉を活用して，温泉ツーリズムやヘルスツーリズムとしても推奨されている。「農」の体験は各地でみられるが，田植え，稲刈り，芋掘りなどがある。「食べる」活動では，農村レストラン，そば，料理，竹林の中で手作りの竹の食器で食事を楽しむなどが人気である。都市の子供達に自然の中で虫取りなどの遊びを体験してもらう，草原で子供達にのびのび遊んでもらうなどのメニューもある。買うという活動では，地元特産の農産物や伝統的なグッズの購買が挙げられる。

おわりに

農業・農村の多面的機能は一言でいえば福祉力で総括できると考える。エコロジカル，資源循環，グリーンツーリズム，スローライフなど本稿であげた様々なメリットを鑑みると，農村社会はこれからの成熟社会にふさわしく，むしろ時代の先端になっていると感じている。この特性を生かしたむらおこしを今後に期待したい。

おわりに：改めて福祉力とは？

- **農業が備えている福祉力**
  ⇒農業の多面的機能
- **農村社会が備えている福祉力**
  ⇒時代の波頭をとらえる農村社会のメリット（特質）

  手づくり（少量多様）、自然食品、有機栽培、エコロジカル、資源循環、コミュニティビジネス、ソーシャルビジネス、ソーシャルキャピタル、グリーンツーリズム、地産地消、生物多様性、里山活用、スローライフ・・・
- **農業・農村の福祉力をむらおこしの起爆剤に**

第９図　農業・農村の福祉力とは？.